

漢竹。蒨々然含千古翠色。而御溝之清流。鏘々乎巖廊之下者。如操琴。禁苑則清秀閑遠。有穆々皇々之趣。凡宮闕無設彩色。無施藻繪。必潔必清。必淳必朴。蓋昭其儉也。恭惟列聖愛民如赤子。仁風恩露。無不廣被者。實在斯儉矣。可不欽仰哉。拜觀二條離宮。離宮即二條城。德川氏所築。規模廣壯。華麗雄傑。足以觀德川氏之奢侈矣。噫興乎儉。而衰乎奢。豈獨德川氏。凡繼其志。述其事者。可以鑒矣。拜觀畢。乘電車。謁北野天滿祠。祠宇宏麗。境內梅樹多。遊金閣寺。寺在衣笠山南麓。為京郊絕勝之一焉。初係西園寺公經所營。後為足利義滿之別墅。喬松森々。積翠萬疊。清幽絕俗之致。蒼古深遠之趣。別開一境。金閣高四十二尺。塗以金粉。赫々煌々之偉觀。經五百歲。而今猶見其髣髴。閣下有池。沈沈淡蕩。曰鏡池。清瑩透徹。倒垂萬象。登閣而望之。山巒環繞。邱壑深邃。而池水淵然成涵之。不圖京郊至近之地。有湖山千里之遠景。可謂絕勝矣。

為憾殊深。

十八日霽。修學旅行。以是日終。衆英氣勃々。終朝食。赴南禪寺。途渡疏水橋。觀漕渠。渠自大津至京師。凡三里。起工於明治十八年。完成於二十七年。經費無慮百二十九萬圓云。南禪寺為龜山上皇離宮。後賜僧道智。殿堂崇闊。泉石幽邃。觀高臺寺。豐公夫人高臺院所居。境內萬松落落。翠色掠人。造清水觀音。倚危崖。架峽壑。高閣層々。巖々衝天。奇巧可驚。望甚曠。遠則山川邱陵之起伏。田塍溝澗之綺錯。如指諸掌。而與夫朝輝夕陰之萬象。麗日烟雨之千景。皆得聚之於一眸之中。可謂曠矣。下清水坂。兩側肆鄙。臚陳陶器。所謂清水燒者也。衆爭購之。十一時還旅舍。晝食後。赴七條。乘汽車。就歸途。窗外風物。依稀如送。十九日霽。七時到新橋。八時歸校。嗚乎。此行也。謁大廟。則厚敬神之念。遊寧樂平安。則深尊王之心。而所過山岳河海城邑雲物。莫一不為進修之資。遊覽浹旬。

二時乘電車。自二條至嵐山。峰巒峭立。蒼翠欲滴。而清流縈之。淙々澗々。神清骨涼。旺然浩然。不復知炎暑為煩。於是賃遊舫三艘。衆分乘之。而遡中流。素湍噴雪者。有焉。綠潭廻清者。有焉。巖岫拗突者。絕壁萬仞者。詭狀百出。各皆一幅董巨倪黃之畫矣。朔迴數町。捨舟上大悲閣。有碑。紀吉田了以浚保津川之功。甚詳矣。復乘舟而還。時日將晡。暮雲填溪澗。杳然。觀更奇。歸途訪野々宮故址。在綠竹青蒨之中。追憶往昔。肅然者久之。五時還客舍。

十七日陰。九時乘電車。赴大坂。車中遙拜稻荷祠。男山祠。抵天滿橋。觀女子師範學校。途上觀大坂城。追想豐公偉業。而又歎其興亡無常也。女子師範學校。在桃山。校舍廣壯。設備整頓。晝食後。造天王寺。寺在市塵迷離之中。絕無清遠閑寂之趣。其堂宇結構。亦遜於法隆寺數等。謁住吉祠。廟貌宏麗。憩茶亭。此地卒業生。歡迎我一行。見餉蒸甘藷。五時還京。不得觀造幣局。

而所得如此。學生之快事。豈有過此者哉。記以示弟妹。

國文

◎私の観る雪

文科四年 堀尾 ト

圓々として板戸打つ霰は頑獷憍傲なる猛夫の概あり、蕭々として木の葉に交る秋の雨は沈痛悲愁なる憂士の風あり、霏々と降り粉々と飛びやがて地に布く六花を見すや、何ぞその様の安靜中穩なる、げに雪はかの自己を誇大視し外界を以て皆之に従屬せしめむとする憍傲の夫にあらず、さりとは又餘りに自己を卑下して有機的生活の中に何等の價値をも認めざる悲愁の士を學ぶにもあらず、一面能ふ限り自己なるものを主張すれども、しかも世態の情勢につれ人事の傳説に従ひ以て社會的生活の如何を達觀し、甘じて之が制限を辭せざる悟入徹底せる君子人にあらずや。

鵝毛に似て飛んで散亂せる稜花を眺め、やがて、視線を一片に注ぎ、その厚ざ誠に厘にも満ちざるべし、然るに一片又一片、一墜又一墜、刹那分秒の撓まざる、見る間に徘徊の人に鶴壁を纏はしめ、三千界に銀の砂を布かしむ、是れ九層の臺も累上に起り千里の道も足下にはじまるの理を示し、以て怠夫をして立たしめ、傭士をして憤を發せしむるの暗示にあらずや。

「天の下既におほひて降る雪の光を見れば尊くもあるか」げに花ならば咲かぬ梢も交りなむ花なき宿も多からむ、あゝこの降り布ける雪の花や、高樓茅屋のけぢめなく城郭埤堦の別ちなく「三千世界銀成色十二樓臺玉作層」の美觀を呈しあらゆる人界を通じて彼是と差別とを超越せる廣寒宮裡にあるの感を抱かしむ、あゝ雪や公平無差別、所親に厚くせず知らざるに薄くせず清廉潔白、權貴に阿らず貧賤に傲らず、されば蘭麝の香高き珠簾の中も朔風洩る、埴生の宿も、少くとも自己生活との關係をはなれただ客觀視したる雪景の感想は等しかるべし偉大なり

しぬ、望月のかげと謳歌して我が世たゞえし藤原氏もいざよふ月は免れず、銀燭のかげ明けく、瑠璃の柱に輝きて管絃響きし平家の榮もやがて水底の都となりぬ、されば夫子は不義の富貴を浮雲に比し給ひ亞聖の至樂は篋瓢の間にありたりあゝ降雪の無言の教訓を味へ。

今吾人は空に知られぬ檐聲を聞けり、見すや天空瑠璃の色はへて白日まばゆく照りわたり雨の一滴をも認めざるに點滴は檐を遶りて琴筑の樂を奏せるを、これ人、中に修養縊蓄する所あらば、かくすよりその徳望あらはれ、期せずして名聲來り、求めずして信賴集ることを示せるの徴象にあらずや。

欣々として立てる白玉の臺、怡々として迎ふる白稜の花、雀は躍りて紅葉を刻み犬は走りて梅花を畫く、「いづこに雪見にころぶところまで」の感は管に芭蕉翁のみにもあらざるべし、あゝ燦爛たる色彩の中に活躍生動あるこの景色は將に寫實主義の美術の表現にはあらざるか。眼を開けば乾坤一白、巍然としてそびゆる

や降雪の平等。

爛熳たる東庭の櫻、灼々たる南圃の桃花、春色洵に掬すべし、たゞ惜むらくは彼に楊貴妃の美ありて橘姫の純なし。爛紅として霜に飽きたる寒山の紅葉秋景亦捨つべきにあらず、されど是にクレオパトルの艶ありてジャンダークの潔なし、もしそれ地上に於ける優美純潔のモデルを求めなば、先づその團扇をあぐべきものこの白皚たる三徑の銀砂にはあらざるか。

群芳凋落して寸草かげを留めず、樹影稜々として生氣の色なく落魄沈衰せる冬枯れの天地、今や雪てふ偉人の御手を借りて白稜の衣を纏ひ白金の笄を簪し、しばしはかなき榮華を衒ふものなり、然るに是非明決にして正邪善斷、光明赫々たる、太陽は出でまじぬ、白稜の美、銀花の麗今はたいづこにか残れる、たゞ一雫の水と化し去れるにあらずや。げに人の世の富と榮華とぞ定めなき、嵐に競ふ春の色朝日待つ間の雪の花、ソロモンの榮華の夢はまたきに醒め、オーステリックの勝鬨もセントヘレナの悲鳴と化

白玉城瑞然として連る銀の戟、天地寂として四面聲なし、あゝこの典陸崇高なる背景の中に「山の奥野の末までも白雪の深き恵にもれぬ御代かな」「新らしき年の始にとよ年のしるしとすらし雪の降れるは」などの歌を思ひ浮べなばこゝに過去積集の經驗と和して好尚理趣に富めるクラシックの美術を味ふを得べし。ふりさけ見ればかすかに立てる宮殿あり、玉斧の修理美しく玉の柱は輝けり、こゝに七寶充滿の寶を降らし、かしこに霓裳羽衣の天樂を奏せり、あゝこれ理想郷の描寫にしてこゝにローマンチックの美術を求むるを得べし、以上は雪景の見方によりて異なる各方面の美術的價值なり。されば降雪の景や三體を統一し三界を超越せる者にして美術の粹といふも溢美の言にはあらざるか。以上は最、單純なる頭の中に至つて淺き經驗を有する我が目に影じ心に感じたる雪にして、もとより一般の眞理として立つべきの價值なく所謂雪景の我觀に過ぎざるものなり。然れども少くとも私一人としてはこの結論を深く信じて

永久に疑はざるものなり、あゝ一人の左袒者あ
らば腑毫の幸甚何物か之に加へむ。

◎修 養

文科四年 櫻 井 藤 枝

銀燭煌々として緑酒漉の如き中に坐し悠然と
して浩歌妙舞する者その歩武は蹠跚たりその意
氣は揚々たり、悠忽背後千仞の斷崖峨々として
怪雲その半を蔽ひ猛獸魔神の叫び山彦と相應へ
脚底萬里の蒼波轟然白山を崩し龍頭岩に狂ひ飛
沫衣を濕す此の際この機彼等は愕然として心戦
き氣息奄々將に絶えなんとすこゝに於て心意轉
た昏迷懊惱して絶叫せんとして始めて黒恬郷裡
の一夢たるを知る嗟乎滔々たる天下それ夢中の
人にあらざるもの果して幾許ぞ。

思ふに一の大國家には必ず一の大精神あり而
してその盛衰消長は直ちに國家の治亂興亡を伴
ふものにして恰も國家は人類の體軀の如く精神
はなほその軀髓の如し。
靈活せる一大精神ありてその美その妙の個人

時北條時政あり豊臣氏に小西石田大野ありしが
如き思ふに是れ必ずしも彼等愚者ならんや彼等
悉く痴漢ならんや只彼等は理想低く私利に耽り
私慾を貪らんとし精神の根柢を捨て術數の末に
走りたるによるのみ嗚呼これ抑々既往の事蹟と
して輕忽に看過すべけんや。

維新以來泰西の文物轟然として入り來るや物
質的文明は頓にその面目を改めぬ而して我が精
神の眞粹は稍國民の腦裡をはなれんとし輕薄
風をなし朝野の間にありて評判よき士は謹嚴至
誠の精神的の人にあらずして融通の才子たるな
り正直を稱て野暮とし篤實を嘲りて變通をしら
すといふ今や黃鐘棄擲せられて瓦釜雷鳴すあゝ
國家精神の衰へたる一に何ぞこゝに至るや。
人やゝもすればいふ天下のために一身を犠牲
に供すと又曰く國家のために身命を擲つこと弊
履よりも易しとその意氣亦盛なりといふべし。
しかも是れかの夢中浩歌妙舞する者と孰れぞ忽
ちにして泰山裂け滄海溢れ迅雷風烈天地を震撼
して至るの刹那顔色菜よりも青からざる者幾人

の上に表はれ來るもの或は正義至誠の念となり
或は尊敬扶持の道義となり以て能く風教をして
醇ならしめ以て能く治化をして隆ならしむべし
我が國は天祖國を肇め給ひ天壤無窮の神勅と
共に金甌無缺千古萬古亦動くことなし故に國家
の大精神は最も強固にして磅礴として大八洲に
充溢せり日本魂と稱するもの即ち是れなり。

吾人は史を繙く毎に我が國の大精神たる日本
魂の一部が武士道として武門の間に現はれ來り
たるを見て所謂古道の俤をこゝに偲ぶと共に更
に日本魂全部の發揚を望んで止まざるなり。

古來英武一世の風雲に鞭ちて蹶起し倒山翻海
の活劇を演じ雄を稱し弱を成すものを觀るに必
ずやその幕僚に高大至誠超然として傑出せる精
神的の偉人あるを要す源賴朝に和田義盛あり豊
臣氏に加藤清正片桐且元あり徳川氏に井伊直政
大久保忠隣酒井忠勝あり是に反して國を亡ばし
社稷を顛覆せるものを觀るに多くは是れ偉人を
遠けて小人を近づけ徳義を輕んじ利口辯佞の徒
を重んぜざるもの殆ど稀なりかの源氏に源原景

かある遮莫東洋の潮流瀾急激にして殺氣まさに
鬱勃たり軍艦造らざる可らず兵備擴張せざる可
らずしかも最も急ぐべきものは國家大精神の
修養にあらずして何ぞ夢見る者よ起てよ醉へる
者よさめよ封豕長蛇は白き牙を磨き紅の舌を吐
きて二六時中汝の前後左右に朶願しつゝあるを
知らずや。

◎山の火

文科四年 長谷川 すが

火事よ火事よといひながら、たれも手のつけ
やうのない東の山は、夜になつて、ます／＼熾
に燃え出した。

「山やける獅子をざる猿が豆食てのどきつき
つ」とうたつてゐた里の子は、はや夢路に入つ
た火のことは分らない、連日のてりで、乾き
つた、多くの木がすれあつて、火をおこしたの
かも知れないと、或物知りはいつた。
こゝは、鶴の首とよんで、御國自慢の一にか
ぞへられ、常緑木のしげりにしげつた中央には